

【研修名】令和元年度 茨城教育の日 研修会

【実施日】令和元年 11月9日(土) 9時30分～11時45分

【場 所】茨城県県南生涯学習センター 多目的ホール

【参加者】大宮、鈴木

【内 容】※当日詳細については配布資料参照

研修テーマ 「地域との輪をつなげよう」～大切な子供たちを守るために～

1. 実践発表「ランドセルがつなぐ世界の輪」

研修推進地区：稲敷・西（稲敷市、美浦村、河内村町）女性ネットワーク委員会

4年前から、稲敷市にてフィリピンのマニラに不要なランドセルを贈る活動を行っており、2年前より女性ネットワーク委員会としても活動に参加。

最初は30個程度のランドセルしか集まらなかったが、ポスターなどを使った告知を積極的に行うことにより年々たくさんのランドセルを回収する事ができるようになり、併せて古着や文房具（使い古し可）、おもちゃも一緒にランドセル内につめて贈る事ができるようになった。たくさん回収したランドセルを梱包する作業が一番大変で、PTAの保護者の方や子供達、200名近いボランティアの協力にて作業を実施。2018/09/18にマニラにてランドセルを配布。

現地では、ランドセルを1人1人にかけてあげ、お菓子などを配りました。

女性ネットワーク委員会としては、この活動において、市町村の輪を広げて活動を行う事の大切さを感じた。また、子供達にとっても、他の国に目を向ける事ができるようになる活動でした。今後は、それぞれの市町村に学んだ事を持ち帰り、それぞれ活動を行なっていく予定。



2. 講演 演題「子育て十人十色」～子供の多様性の意識を育む視点～

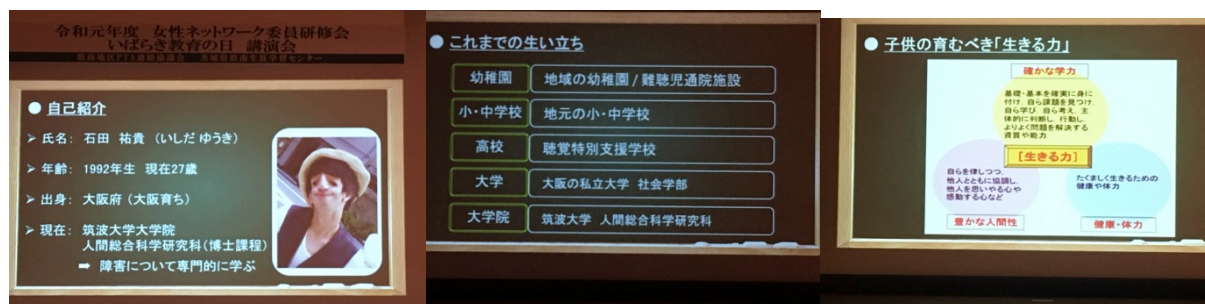
講師 筑波大学大学院後期博士過程人間総合研究障害化学専攻 石田祐貴 先生

トリーチャーコリンズ症候群（顔の周辺の骨が十分に発達せずに生まれてくる病気。いくつかの症状がまとまって現れる。聴覚障害を持つ）である石田先生が、障害を持つことによって今まで経験してきた社会との関わりにおける問題、自分の親が自分とどう関わってきたかについて講演。障害者の持つ、「見た目問題（見た目に症状がある人が見た目を理由とした差別や偏見のせいでぶつかる問題）、今後目指すべき社会像「共生社会（障害者が積極的に参加貢献できる社会）、インクルーシブ教育の推進（障害のある者と無い者が共に学ぶ事によって人間の多様性の尊重等を強化する）」について講演。

また、子供の概念や意識は周囲の身近な人々をモデルとして幼少期から無意識に形成されていくものであるため、大人（保護者のみなさん）が適切な知識、言動によって障害者に会った時どう接して行くべきかを伝えてあげる事で、モデルを示す事が大切である。

「こころのユニバーサルデザイン（みんなが共に気持ちよくくらすために、自分以外の事を考えてちょっとした気配りをする事）を皆さんに実施していただきたい。

両親には、「自ら考えて判断し行動する力」、「様々な人との多くのコミュニケーションの経験ができる場、機会を提供してもらった」この点に感謝している。 といった講演内容でした。



※障害を理解したいと思って下さった方に勧める本

大人向け「この顔と生きるということ」岩井建樹 著/朝日新聞者

「カオニモ負けず」水野敬也 著/文響社

子供向け 小説「ワンダー」(WONDER, もうひとつの WONDER) ほるぷ出版

映画「ワンダー 君は太陽」

【参加した感想】

実践発表の「ランドセルがつなぐ世界の輪」では、フィリピンのマニラの小学校へ子供達が不要となったランドセルを回収して贈る取り組みについての発表を聞きました。

我が家でも息子が不要になったランドセルを寄贈しようと思ったのですが、息子は思い出にとっておきたいと言うため保管しています。今回の発表の中で、ランドセルが、外国の子供達に贈られ、笑顔で写真に写っている姿を見ました。日本のランドセルは、両手が自由になり使いやすいそうです。この発表を見て、子供達が、このランドセル寄贈の取り組みをもう少し理解していたら、もしかして我が子も海外の子に使ってほしいという気持ちになったかもしれないと思いました。ぜひ今後、ランドセル回収を行う時には、保護者への告知だけでなく、子供達が自分のランドセルを寄贈したい！という気持ちになるような取り組みも行っていただきたいと思います。私自身も、我が子に伝えて行くつもりです。

講演会ではトリーチャーコリンズ症候群の石田先生から、見た目が周囲と違うことにより日常生活や対人関係で嫌な思いをした経験や、聴覚障害もあったため、友人とのコミュニケーションがスムーズに取れないことにより味わった周囲からの疎外感や孤立感についてお話していただきました。

多くの保護者の方が、電車やバス、お店などで、障害を持っている方に子供と一緒に出会った時、大人である保護者の皆さんが、障害を持っている方とどのように接していけば良いか？

子供が障害を持った方に失礼な事を言わないようにと子供を遠ざけるのではなく、その人が、どうしてそのような障害をもっているのか理由をきちんと説明し、仲良くしていこうと伝えてくれるだけでも良いと言っていました。こういった周囲の関わり方が、子供にとっていかに大切か改めてわかりました。

石田先生は、ご自身が学校に通っていた時、担任の先生がとても親身になって下さったそうです。それはとてもありがたかったが、特別すぎる気遣いは逆に辛かったそうです。石田さん自身は、1人で居る時は全く普通に生活できており、人と接する時だけ、困難を生じると、お話されていたのも印象的でした。私たちは、障害のある人達と出会った時に「普通では無い」とまず思ってしまいがちですが、障害有無以前に「人は違って当たり前」だと言うことを忘れてはいけないと思いました。

石田先生が親に感謝されている事をあげて下さいましたが、それは、我が子にも身につけて欲しいものであり、そう言ったことをきちんと親から学び、自分のものにできたのは、石田先生自身の強い心と意思による努力のたまものではないかと感じました。

これから私自身も、こころのユニバーサルデザインを意識して常に思いやりをもった行動をとれるよう、我が子のお手本になれるよう頑張っていこうと思いました。

以上
作成者：鈴木直子